

インドの教育事情

2011年の国連推計で人口が12億人を超え、中国の13億人を将来超えると予想される。インド人は数学が強く、英語も流暢な優秀な人材が多くいると言われている。義務教育は6歳から14歳である。初等教育は5年生まで、中学は6年生～8年生の3年間、高校は9年生から12年生。大学は医学部5年間、技術系学部4年間、商学部系3年間。

推定800万～1000万人の子供が学校に行っていない。多くは貧しさの為に、家計を支える為に働かなければならない。娘を学校に行かせなかったり、低いカーストの子供を拒否したりする地域もある（CNN World, 2010）。就学率を上げる為に、1995年にMid-Day Meal Schemeが開始された。給食が公立と国が援助するすべての小学校で無償提供される。制服と教科書も国から無償で配布される。

貧困をなくし、国を繁栄させる上で教育が重要であると考えられており、2011年の教育予算は24%に増額された（The Times of India, 2011）。2001年の識字率は65%であったが、2011年には74%に上がっている。

インドの小学校英語教育

インドでは私立の小学校が意外に多く、約20%で、デリーだと約45%である。（National University of Educational Planning and Administration, 2012）。私立の小学校では教育言語は英語で行い、質の良い教師もそろっている。少しお金のある中間層の家庭は子供を私立に通わせる。もっと裕福な家庭はイギリス式の寄宿舎のある私立に行かせる。

ニューデリー市にある公立小学校 Subhash Nagar に訪れた。授業は8:00～13:00で、10:30に給食が出る。クラスは平均50人で定員は55人である。場合によっては、80人位のクラスはがある。この学校の生徒の両親はオートリクシャー（ドアのない三輪自動車で庶民のタクシー）の運転士や家政婦などの肉体労働者が多いので半分は教育に無関心。学校の先生を敬う習慣があるので、親からの苦情は少ない。公立小学校は担任がすべての教科を教える。教科はヒンズー語、英語、算数、環境科学、音楽、美術、社会、体育。英語は1日1クラスで、40分授業。

ニューデリー市内のGuru Nanak Public Schoolはシーク教の人たちの私立の学校で、3歳～17歳（12年生）が通う。月～金の8:00～2:00と第3土曜日に学校がある。3歳児から英語とヒンズー語の授業がある。高学年になると加えてパンジャビ語や宗教の授業もある。



ニューデリーから車で4～5時間の私立の学校 RNL Vidya Mandir, Bahal を訪問した。2歳半～8歳の生徒を教育している。やはり、主に英語で教育をしている。1年生で日本の中1程度、2年生で中2程度の英語の授業内容であった。60～70%は2～3歳から入学をする。ほとんどが10～15分程度の近距離から通学。2時の下校時のお迎えに多くの若いお父さんが来ていた。店主や農民が多いためである。1年生のクラスは32人中9人が女兒であった。

同じ Haryana 州にある BRCM Public School は寄宿制で9才（4年生）～17歳（12年生）が寝起きを8つのハウスで共にする。1987年に創立された男子校だが、数年前から男女共学になった。広大な敷地の中はゾーン毎に



ガードマンを配置したゲートがあり、安全が保たれている。

乗馬部やアーチェリー部は学校の飛び地に専用練習場があり、イギリスの寄宿学校にも負けないほどの教育環境が整っている。すべて英語で教育が行われているので、低学年から高学年までどの生徒と英語で会話してもまったく問題のないレベルであった。ネイティブの外人教師はいない。生徒はインド各地や外国の裕福な家庭から来ている。規律正しく、ハキハキした様子にインドの将来のリーダー達の姿を見た思いがした。